

週刊 R O 通信

2 0 0 8 年

2008.1-2008.12 No.705-No.757

奥井 禮喜



有限会社ライフビジョン

退廃的汚染的文化の本質	6
なぜ憲法を勉強するか	10
現代の鍊金術に見える	14
労働時間が本当の主役	18
締まっているか経営者	22
公務員制度改革のエリート意識	26
ジャーナリズムの官僚化	30
自主的自発的活動の文化	34
喋らない職場の人々	38
見えない組織事情	42
欲望扇情経済の問題	46
新人教育・組合の場合	50
ガソリン税問題	54

ハイブリッド資本主義論の誤謬	58
権力者の権力論	62
北京五輪とチベット問題	66
労働時間の歴史	70
憲法改正論者の誤謬	74
出直し・新規まき直しのススメ	78
糀について	82
現代の美的感覚	86
退職準備教育への期待	90
鮎	94
尋ね人の時間	98
続「尋ね人の時間」	102
煙が眼にしみる！	106
今日の杞憂	110
杞憂の続き	114

祭り鮓	118
拝金主義と報道の変わり身	122
どんな仕事をするか	126
平和への思い	130
われわれは戦争から離れていない	134
五輪の後	138
こんな時代の労使	142
解散権実質的に行使した!	146
馬追虫の狂想曲にやも似たり	150
日米同盟論の軽薄	154
宰相論	158
政治家の皆様く	162
金融危機に一畠	166
G7に一言	170
国際金融制度改革	174

戦後通貨危機の意味すれぬの	178
一つの解散論	182
新渡戸稻造博士の卓見	186
愚直と愚鈍	190
共生を考えるとき	194
解散優先論	198
同情と共感	202
信頼回復の機会	206
G Mの破綻が示唆する、ル	210
労働時間適正化の好機	214
あとがき	218

退廃的汚染的文化の本質

No.七〇五 2008.1.7

パンツ一丁、おん出できて「関係ない」とやるのが受けているなんてのは、好意的に見ても宴会芸、宴会芸としても下劣の類、面白くもない浮世の大衆がウップン晴らしに喝采するなんて理屈もまた断じて下賤である。すらすら芸能人を並べたトーク番組（なのかどうか）みたいなのが多い。連中はゲラゲラ笑っているけれど何がおかしいんだか。いわゆる「樂屋落ち」であつて、单なる馬鹿笑いの域を出ない。

もともと大衆社会なるものは、文化がキッチュ (kisch) 傾向に進むと定説的に指摘されてきたが、天下のTV局が「受ければいいのよ」とばかり、このよくな画像を垂れ流すのは思想的頽廃以外の何事でもあるまいなあ。格別高尚ぶる気持ちはない。さりながら、企業の社会的責任がとやかく言われ、「よい商品を提供せよ」と吼えること人後に落ちない TV局が、粗悪商品を垂れ流してあつけらかんとしているのは理解しがたい。

先週の本通信で「偽」について書いたら、畏友某氏——各種業界の偽装はもともと長年おこなわれてきたことで、それが露見した。「偽」は露見して初めて「偽」となる。ゆえに二〇〇七年は「露」ではないか云々——

なるほど、卓見である。「偽」と大書してただ悲憤慷慨するよりも、「悪事やつたらいつかバレまつせ、諸悪のぐく一部にしても露見したから上等やないか」と明るく元気に表現するほうが、より知性的やなあ。

「国民性を知るには『一流の文学作品を読め、人生を考えるために』は一流の文学作品を読め」という。「一流、まさにTVと置いてもよろしいだろう。

かつて大宅壮一氏が「『億総白痴化』と一刀両断し、後に碩学林達夫氏は「ありや言い過ぎだ。highrow より lowbrow やで、おおいに TV から勉強させてもらつとるわ」とのたもうたが、現状の覧になれば、なかなか、そうそう泰然自若としてはいられまいなあ。

一つには、庶民におかれでは、多くの場合「好きか、嫌いか」の、よく言えば感性的判断が主流なのではあるまいか。なるほど、感性は大切である。若かりし頃、「年寄りは感性がないぜ」などと嘯いたことが少なくない。

「箸が転げても笑う」と言う。Slap stick action（どたばた）の面白味には、またそれなりの意義があり、それを鋭敏な感覚で捕まえるのは感性の感性たる所以である。では、最近の人々は感性が鋭敏になつたのか。

と、振つてみれば、どうもそうとばかりは考えられないものではあるまいか。むしろ人々の不感症が強くなつたから、TV、週刊誌をはじめとして、露骨、露出、露悪、下賤の氾濫となつたと見るほうが妥当であろう。

思うに「好きか、嫌いか」の以前に、「そもそも○○とは何か」の基本・基盤が不可欠なのであるまいか。感性でキヤツチしたとて、判断するには価値基準が必要だ。価値基準なき判断が果たして成立するのであろうか。

思い出すのは広津和郎さんの「散文精神」論である。戦後、松川事件の弁護活動に活躍された作家である。一九三八年か三九年か、軍部の跳梁跋扈著しい時期、時代に悲観するな、どんなことがあっても音を上げるなという要旨。

——それはどんなことがあってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、生き通していく精神、それが散文精神だと思います。

この国の薄暗さを見て、直ぐに悲観したり滅入つたりする精神であつてはな

らない。そんな無闇に音を上げる精神であつてはならない。

ぢつと我慢して冷静に、見なければならぬものは決して見逃さず、そして見なければならぬものに怯えたり、戦慄したり、眼を覆うたりしないで、何処までもそれを見つめながら、堪えて、堪えて生きていこうという精神であります。――

広津さんは松川事件で全国を講演して回られた。民主主義社会になつたとはいえ、裁判の行方は容易ならざるものであった。講演は派手ではなく、聴衆に媚びもせず、ナメもせず、ぼそぼそと低い声でやられたらしい。それはまさしく、広津流散文精神の氣概がおおいに発揮されたのであるう。

今は軍部が跋扈する時代ではない。戦後の廃墟と混沌の時代でもない。しかし、皆が漂うているのではなかろうか。異様な気配が感じられないか。大衆社会、「How to Live」を問わねばなるまい。

なぜ憲法を勉強するか

No.七〇六 2008.1.14

普通人の学会、わがライフビジョン学会では、憲法学習会を開始した。威勢よく「戦後レジーム脱却」を高唱して登場した首相が ABE つちやつたりして、憲法改正問題が遠のいたような雰囲気もあるのに、なぜ憲法なのか。

品格本の幕を切って落とされた某氏は「なぜ人を殺してはいけないのか」という問い合わせで「いけないからいけないのだ」と言えばいいのに、頭の悪い奴らがもたもたしていると嘲笑つておられた。

私はそつくり、その嘲笑を某氏に返却いたそう。まつたく分かつておられない。専門外のことになると嘴挟むなど言うのではない。某氏もまた、まつたく憲法とは何かをご存知ないと抨察するからである。

石や棒を握んで走り回っていた時代からすれば、人間はずいぶん科学的進歩を遂げたものだ。たかが動物の一つに過ぎぬ人間が、宇宙を駆け回るほどの知識社会を確立したのだから。

ではあるのだけれど、傲慢になつてはいけませんぞ。本当に自給自足して生きられるような「自立人間」が世界に果たしてどのくらい存在しているであろうか。品格本の某氏など、ひ弱な紳士の典型ではあるまいかね。

人間は一人では生きられない。しばしば政治をけなし、社会を嘆息するけれども、にもかかわらず、われわれは、その中でしか生息できない、まことにヤワな、「葦」よりも実は弱いのではないか。

個人は社会があつてこそその個人である。個性發揮するには社会があつてこその個性發揮である。某氏はしばしば「自我」と「自己中心」を混濁して解釈されている。数学者とはもつと論理的なインテリかと思つていたのに。

話が脱線気味になつた、失礼。「なぜ人を殺してはいけないか」。われわれは社会を形成するに当たつて、そのように「約束」したからである。それぞれの憲法は、人々の最高の「約束」でなければならないのである。

「いけないからいけないのだ」というような論法の本質は、実に「言論封殺」以外のなにものでもありはしない。知性的だと思つておられるから本をお書きになるのだろうが、実に反知性的としか表現のしようがない。